

令和4年度 奈良市立辰市こども園 研究実践概要

園長名 田中 典子

全園児数 181名

1. 研究主題

「心動かし、意欲をもって生活する子どもをめざして」
～一人一人の子どもの動きを見つめる～

2. 研究年度 初年度

3. 研究主題設定理由

日々の生活や遊びの中で、保育者との関わりを通し、気持ちが安定していくことで自分から遊んでみようとする姿が見られるようになってきている。子どもの姿を保育者間で共有する時に、ただ見取るだけでなく、着目する点を明確にし、継続的に見取りを進めることで、子ども理解に努めたいと思い取り組みを始めた。

4. 具体的な研究内容

① 研究のねらい

- ・保育者と一緒に遊ぶ中で、子どもの心の動きを見つめる。

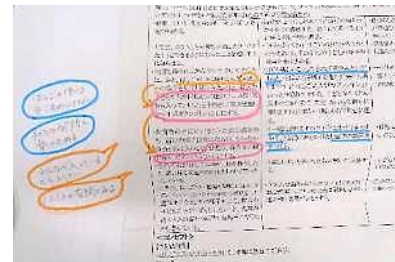
② 研究の重点

- ・遊びや生活の中で、「子どもの心の動きとは」について職員間で共通理解を図り、着目する視点を明確にする。
- ・各年齢の事例や写真を持ち寄ったり、園内研修を通して、心が動いている姿やその要因、環境構成や援助について考え、子ども理解に努める。

③ 活動の方法

【写真、事例、園内研修から子どもの心の動きをよみとる】

子どもの心の動きやその要因（環境構成や援助）を考えたり話し合ったりする。



子どもの心が動いた姿、その要因、保育者＝保と表記する。

【乳児】

0歳児 11月（1歳5ヶ月）

A児は、転がし遊びに気付き興味をもった様子でじっと見つめていた。保「Aちゃんも転がしてみ
る？」の言葉掛けで、ビールケースの台にかかったトイにカプセルを乗せようとするが、カプセルはビ
ールケースの穴に入ってしまった。「あら、穴にはいちゃったね」と保がカプセルを取り出しもう一度
手渡すと、A児は穴を見つめてもう一度ビールケースの穴に入ると、保の顔を見てニコッと笑いかけ
た。保もA児に笑いかけながら「あっ！また入った」とA児に共感してみせた。A児はその後、カプ
セルを転がさずにビールケースの穴に入れては、保と微笑み合うことを繰り返して楽しんだ。

〈考察〉

初めての遊びや経験に控えめな姿が見られるA児に対して、日頃からA児の様子を見守りながら関わり、
A児がしたいと思うことを楽しめるようにしてきた。A児が興味をもったことやものに対して、保育者が
側で共感し、A児の気持ちや思いを保育者が言葉にすることで、安心して遊ぶ姿が見られた。

1歳児 11月

A児がトンネルの前まで走っていき、中を覗き込む。保も一緒に覗き込む。その姿を見てB児C児も
来て一緒に覗き込む。B児が真剣な顔で「こわいな」と言う。保も「こわいな」と言う。B児と保の「こ
わいな」と言う声が少しだけトンネルの中に響き、後はシーンと静かなまま。保はあえて声を出さずに
静かに見守る。B児が小さな声で「こわっ」と真剣な顔。保はB児の「こわっ」と言う言葉を聞いて「こ
わいね、くらいね」と言う。A児C児はニヤッと笑い合いながらお互いの顔を見る。しばらくみんな
沈黙。保も静かに見守るが、3人の反応を見て思わず笑ってしまう。保の笑い声が響く。B児が「あ
ー！！」と声を出す。A児C児が少し控えめに「あー」「おい」などと声を出してみる。そして響く。保
も一緒に子ども達の真似をして、色々なトーンの声を出して楽しむ。A児B児C
児が繰り返し色々な声を出し、楽しみ始める。保の色々な声のトーンの中でも特
に低い声が怪しげに響く。「きゃー！！」「おばけ！！」と3人とも逃げる。保も
一緒に「きゃー！！」と逃げる。1番怖がっていたB児が「怖かったな！もう一
回しよ！」と言う。B児の声を聞いて保は「もう一回する？しようか！」と言う。



〈考察〉

トンネルの中の薄暗さや静けさに興味をもっていたが、一人ではそれ以上踏み込む事のできなかった空
間を保育者が一緒に覗き込んだことで、声の響き方や、夏にしていたおばけの遊びを思い出したのか「お
ばけ」と想像して逃げる楽しさを遊びにすることができた。また、子ども達の反応を見て保育者が笑ってし
まった事で、怖い雰囲気や響きから、楽しむ声の雰囲気になり変わり、それぞれ自分の声を出しはじめ
、響き方を試して楽しむ事ができた。

2歳児 2月

秋頃から『3匹のこぶた』の絵本を読み、園庭ではおおかみやぶたの登場人物になりきって遊ぶ姿が
ある。園庭で遊んでいるA児が側を通りかかった保に「先生、ぶた～」と叫んだ。保が声色を変え「な
んだって～。私はおおかみだよ～」と叫び返した。するとA児が「キャ～」と叫びながら走り出し、捕
まらないようにミニハウスに逃げ込んだ。側で見ていたB児が保に「おおかみしたい」と言い、一緒
になりきって遊びだした。A児と保、B児とのやりとりを横で見ていたC児がドアの入り口に立ち、手
で横に鍵を閉めるような仕草をしながら「うっしゃ～ん」と言い3カ所鍵を閉める
真似をした。「トントントン、いれて～」と言うと、C児は「い～や～よ～」と言
う。「フウフウ」吹き飛ばす真似をすると、A児とC児は「キャ～」と言
ってミニハウスから逃げ出した。おおかみ(保)に捕まったA児は嬉しそうな顔
で保に抱きついた。その後、D児も加わり何度もやりとりを楽しんでいた。



〈考察〉

保育者がおおかみになりきって一緒に遊ぶことで子ども達も物語に入り込み、言葉でのやりとりをし
てつかまらないように逃げるという遊びを夢中になって繰り返し楽しむことができた。

【幼児】

3歳児 10月 「山が大変身?!」

A児はスコップを2つ持って「先生、一緒におやまつくろう」と係に伝え、「いいね。おやま作ろう」と一緒に山を作り始める。

山が出来上がると、A児は「トンネル作りたい」と言ってスコップをゆっくり動かして穴を掘り始めた。その様子を見ていたB児が草花や木の枝、石などを集めて、A児が穴を掘っている上にそっと草花2つ並べる。木の枝をつきさして「これは鼻やねん」と係に見せる。「おもしろいね。お顔ができたね」と発想に共感する。その様子を近くで見ていたC児が何かひらめいたように勢いよく近くの草むらへ走っていきクローバーや草花を集め、山の頂上に乗せて「髪の毛できたー」と笑いながら見せ、B児は「いいね! いいね!」と拍手をしながら喜ぶ。

A児は、B児やC児が作ったものに何度か視線を向けながらも1人夢中になってトンネルを作り続ける。係は「すごいね。もう少しでつながりそうだね」と黙々とトンネルを作り続けるA児の姿を受け止め「顔ができてきたね! 口はどうやって作ろうかな?」とつぶやく。その時、偶然C児がのせた髪の毛の中から白い石がトンネルの中に転がり落ちる。するとA児は、はっとした表情で「あっ! 歯みたい」「口あいてるから歯がある!」と言って口に石やクローバーを並べ、歯を作り始めた。係は、トンネルを口、白い石を歯に見立てたA児の発想にびっくりした表情で「すごい! 口が開いているんだね」と驚き、一緒にクローバーを並べる。口が出来上がるとA、B、C児は顔を見合わせて笑い合いながら「ポテトですよ」「美味しいでしょ」サラダできましたー」と食べさせてあげる。係は、「本当に食べているみたいだね」と一緒に口に運んだり、「とっても美味しいですよ」と楽しい雰囲気を作ったりする。A、B、C児はお腹いっぱいになるまでご飯を食べさせてあげていた。



〈考察〉

A児が遊んでいた山に、偶然転がり落ちてきた白い石を歯と見立てた時に、保育者がタイミングよくA児の発想に共感したり、驚いたりしたことでB、C児と一緒に、目や髪の毛、歯をつくったり、ご飯を食べさせてあげたりしてさらに遊びが展開した。

保育者が一緒に楽しさを感じ、予想もしていなかった遊びの展開に驚き、子どもの気付きや思いなどありのままの姿を受け止めたことで一人一人の“したい”という心の動きを見取ることができた。

4歳児 7月 「泥はお水で洗ったらとける」

A児「先生、野菜の葉っぱ取ってきた」と、園庭で抜いた雑草を係に見せている。その姿を受け止めるとA児は次々に野菜を抜いていく。近くで見ていたB児も、野菜を抜き始めた。A児は抜いた野菜をじっと見つめると、野菜の根についている砂を手で落としている。係が「何で砂落としているの?」と尋ねると、A児「お砂はいらんねん。」と話し、B児「お野菜やから、お砂はいらんねん。食べたからお腹いたなるから」と言いながら、根についた砂を落としてはバケツに集めていく。しばらくすると、B児は、思いついたように水がはってあるタライのところへ走り、土がついた野菜を洗い始める。洗い終わると、B児「お水で洗ったらきれいになった。だってね、泥はお水で洗ったら溶けるから」と、自信満々に係に話す。A児にB児の気付きが聞こえるよう「水で洗ったら泥がとけるの?!」と驚いたり、「ずっと泥で遊んでいたもんね」と今までの経験を認めたりする。近くで見ていたA児も野菜をもってタライまで走り、水で洗いA児「お砂とけた!」と満面の笑みで話し、繰り返し遊んでいた。



〈考察〉

A児が雑草を野菜に見立て、その姿を保育者が受け止めたことで、B児も雑草を“野菜”に見立てて遊びが広がっていった。「野菜に砂はいらない」というA児の思いを聞いて、B児は今まで泥で遊んだ経験から水で洗うことを思いついたと考えられる。また、思いついたことをすぐに試せる環境があり、試してみると「できた!」という達成感が、「泥は水で洗ったらとける」と自信をもって保育者に伝えられた。保育者も一緒に遊びを楽しみながら、土が水にとけるおもしろさや不思議さに共感したり、今まで

の経験を認めたり、友達に伝わるように知らせたりしたことで、“やってみたい！やってみよう！”という思いに繋がったと考えられる。

5歳児 2月「スープ決定戦」

A児、B児は前日より楽しんでいたスープ決定戦を「今日もしよう！」「今日は辛いスープを作って飲んだら火を噴いてしまうくらいのスープを作ったらいいんじゃない？」と、スープ作りの準備をしながら話をしている。保が大根をおろし器でおろして、スープを作っていると、C児が側に来て、「先生のそれ、やりたい」と、伝えに来た。C児にも同じ目的をもって遊んでほしいと思い、スープ決定戦をしていることを伝える。C児はD児を誘い掛け、「Dは野菜切るな」「Dちゃん、野菜切ったらこのお鍋に入れてな。野菜が入ったら水入れよう」と、スープのつくり方を共有し、役割を分担しながらスープづくりを進めていく。B児が「スープ決定戦まで後2分で一す」と、叫ぶとC、D児は「急がない」と、花を摘みに行きスープを完成させる。B児が「時間で一す」と言うと、順番に味見をし、それぞれ美味しいと思うものを決める。票の数が3対2となると、A児が「他の人にも聞いてみよう」と提案し、2輪手押し車にスープを乗せて運ぶ。スープ決定戦の結果を聞くと、C児が満足そうな表情で「ひきわけだった」と話す。



〈考察〉

前日もスープ決定戦をしており、「今日もやりたい」という思いが、今回の遊びの姿に繋がった。1月に、作品展に向けて「友達と一緒に作る」「役割を分担しながら作る」という経験をしてきたことで、作りたいもののイメージを共有したり、友達にしてほしいことを伝えたりしながらスープづくりを楽しんでいたと思う。また、やりたいと思ったことを実現させるために、今までの遊びの経験から、スープの飾りつけにお花を使ったり、2輪手押し車を使って運んだりしていた。スープ決定戦をする、という目的があったことで、友達のスープと比較をしたり、より理想に近づけようとしたり、友達と力を合わせたりしながら遊ぶ姿が見られた。

5. 研究の成果

- ・職員間で“心が動いている姿”“保育者はその姿をどこで見取るのか”を事前に明確にしたことで、写真の撮り方や事例、園内研修での視点や話し合う内容など焦点を絞って話し合うことができ子ども理解に繋がった。
- ・一人一人の心の動きを見つめるために、しぐさや表情など、日頃から保育者がアンテナをはって心動く瞬間を見逃さないようにすることが大切だということがわかった。

6. 今後の課題

- ・子どもの姿から、心が動いた要因（援助や環境構成）を見取ることができたため、次年度は、子どもの心の動きからより遊びが続くようになるための保育者の援助や環境構成のあり方を探っていきたい。
- ・明日の保育に繋げるために、意見を出し合い、環境構成や援助を見直していき、再構成で見えてくる子どもの姿を話し合う機会をもっていきたい。